やまもと　　しゅうじゅん
山本　秀順　　宗教家

1911(明治 44)年～1996(平成 8)年

1. 経歴・狭山市とのかかわり

1911(明治 44)年 2 月 26 日、入間郡水富村大字根岸(狭山市根岸)の真言宗智山派高竹山明光寺に佐藤盛範と芳子の次男として生まれ、秀郎と命名された。3 歳 5 か月で母を亡くし、7 歳で水富尋常高等小学校(水富小学校)に入学する。1924(大正 13)年、13 歳の時、高尾山薬王院で第 26 世志賀照林から兄盛郎とともに出家得度し、秀順の名をもらう。1929(昭和 4)年、埼玉県立川越中学校(県立川越高校)を卒業する。

1930(同 5)年、19 歳で東京府北豊島郡石神井村(東京都練馬区石神井)の智山専門学校本科(大正大学)に入学し、真言密教を学び始める。1932(同 7)年、21 歳の時、妹尾義郎(せのおぎろう　1889～1961)の講演に深く感銘する。1937 年(同 12)年、新興仏教青年同盟に参加し、機関誌に戦争反対の一文を投稿する。250 日間留置され獄中で他宗の宗祖の生涯などを学んでいたが、ある日、小窓から差し込む光で仏教の本質を会得した。1939(同 14)年、巣鴨拘置所(豊島区東池袋)で 3 年の禁錮を受けるが、執行猶予で 450 日間ぶりに釈放される。

2. 主な業績

1942(同 17)年、30 歳の時、長野県松本市の山本栄仙が住職をする兎川霊瑞寺に入山し、保立俊恵の媒酌で長女「志げ」と結婚し山本姓となり、1944(同 19)年、同寺の住職になる。1952(同 27)年 12 月、僅か 41 歳の若さで推挙され、高尾山薬王院の第 31 世貫主(かんす)に就任すると、一山の僧俗を率先垂範し、多くの弟子を薫陶し、仏舎利塔の奉安を初めとして仁王門の再建、本堂の拡張など次々と境内の整備に着手した。1968(同 43)年、57 歳の時、京都の真言宗智山派総本山智積院から大僧正の僧階を授与される。保護司や人権擁護委員として更生保護活動に尽力し法務大臣より勲五等瑞宝章を表彰される。また、「指月」の俳号で俳句をたしなみ、句集『実生』や『日月無私』を発刊する。そして、戒律に即して生活を調え、清貧な生活を送った。

高尾山薬王院大本坊

1993(平成 5)年、41 年の長きにわたり務めた貫主職を弟子の大山隆玄師に譲る。1996(同 8)年 2 月 4 日、84 歳で遷化し、「大本山高尾山第三十一世中興第一世」として境内の先師墓地に葬られる。秀順は生前からラジオやテレビ、講演会などをとおし、仏教を平易な言葉で語り掛け、「 昭和の名僧」と呼ばれ、世に広く知られるところとなった。

3. 特 筆

国道 468 号「首都圏中央連絡自動車道」が構想され、高尾山と八王子城跡の下にトンネル掘削計画が発表された。すると、1967(同 42)年、56 歳で「高尾山の自然をまもる市民の会」と「高尾山自然懇話会」の会長に就任し、あらゆる生命を尊ぶ「禽獣草木悉有仏性」の立場から高尾山を「殺生禁断」の地とし、時代に先駆け、自然を破壊する行為に反対した。また、「明治の森高尾」の国定公園化に取り組み、暖帯林と温帯林が共存する高尾山の貴重な自然保護の先駆者となった。秀順は、年間約 350 万人の参拝客・登山客が訪れる霊山・高尾山の基盤を築いた人物と言ってよいだろう。

〈参考文献〉山本秀順著『生きていること』家の光協会

文責・権田 恒夫 2020.2